ミシマサイコ復活、活用へ

かつては伊豆特産品、今は絶滅危惧種

驚きの量を産出

明治初め年100キロ超

東伊豆・大川で古文書発見

細野高原に自生する植物のうち絶滅にひんしているものを育てている自生植物園。右中央が山田昌彦さん＝東伊豆町稲取の細野高原

わずかに残る東伊豆町細野高原に自生するミシマサイコ。極めて貴重（山田昌彦さん提供、下の花も）

山野に自生し根が生薬に使われるミシマサイコ。伊豆では具体的な採取例が確認された。一方、かつては伊豆や箱根、富士山の裾野などで良質なミシマサイコが採れた。現在、野生種は採り尽くされ、絶滅危惧Ⅱ類に分類。今から150年ほど前、東伊豆町大川で年間100㌔を超えるミシマサイコを産出したとする古文書が見つかった。三島市などでは栽培による復活やサイコを材料に商品化が試みられ、伊豆市にはサイコなどハーブを生かした観光施設も構想される。伊豆を代表するご当地名の付いた植物、ミシマサイコの最新事情を取材した。（文、一部写真　森野宏尚）

東伊豆町大川で見つかった古文書（大川区所有、町文化財に指定）は1873（明治6）年、当時の伊豆国賀茂郡大川村が足柄県韮山出張所に報告した「薬品生産取調届書（書上帳）」で、明治初期の3年間に年間100㌔超のミシマサイコを産出していたことを記す。この量は極めて多く、関係者を驚かせている。

古文書は伊東市の小学校長や東伊豆町教育長を務めた飯田伊三男さん（76）が地元に残る古文書を整理中に発見。「柴胡：三拾貫目　明治三庚午年　生産」などとあり、69（明治3）年から72（同5）年まで年間30貫目を生産＝と権令（知事）の柏木忠俊に届け出た内容だ。今の重さでは112・5㌔にもなる。

明治初め年間30貫目を産出したとする古文書を見る飯田さん＝東伊豆町大川

飯田さんは「江戸時代から間もない、この頃の大川の産業はたきぎや炭、シキミなどだが、柴胡と100㌔超という量に驚いた。薬品（漢方）に使われるのは乾かした根で、30貫目というのは当然、乾かした状態だと思われ、それだと糸計、分量は多くなる。何も産業がなかったことから、現金収入になる柴胡の生産に力を注いだのだろうか」と想像を膨らませた。

植物に詳しい同町稲取の元高校教師・山田昌彦さん（81）は「天城山近くに帯木山があり、山頂付近は平ら。この辺りで採取したのではないか」。加えて「細野高原では戦前ぐらいまで、おばあさんたちが小遣い稼ぎでミシマサイコを採っていた。細野高原にはわずかに自生種が残り、増やすため『自生植物園』を設け、仲間と育成の実験中」と話す。自生のミシマサイコは全国的にも珍しい。

伊豆大事典を刊行したNPO伊豆学研究会・理事長の橋本敬之さん（67）は大川の古文書の柴胡は分量からみて「栽培」を指摘する声もあるが、「明治初期という時代から野生種で間違いないだろう」との見方をした。その上で「江戸時代の地誌『増訂豆州志稿』に狩野、大見、伊東に多いとあり、伊豆の国市浮橋ではかつて十足村、萩村、池村の産物に載せたりなどとある」と解説した。

特集　熱視線

三島では商品化も

薬になる根は利用が困難？　特性同じ茎や葉使う

ミシマサイコに名を冠するプランターも設置する。軒、裾野に2軒など80軒の三島市では2014年、栽培農家がある。三島でも有志がミシマサイコの会（星野建司会長、会員28人）を立ち上げ、市内の小中学校への苗配布や講演会、育て方の講習会、生け花や押し花の指導や展示、サイコを使ったハーブティー作りや試飲会などを行ってきた。同会なども協力し三島郵便局にミシマサイコの花壇を整備、生涯学習センターに原方面に75軒、御殿場に3

商店会が店前に鉢植えを置いたり、市は東本町の工（旧三島測候所）の花壇で栽培したりする取り組みもしている。

星野会長（73）は「ミシマサイコ（根）を薬として売るには製薬会社のマニュアルに沿った土壌作りなどが必要。医薬に関したことは難しい。ただ県内には牧ノ原高に4軒、御殿場に3

箱根は浸透性が高すぎ、全体的に肥料分が多すぎ（肥沃すぎ）て根が大きくなりすぎ倒れてしまう。それなら切り花にーと考えたが、花も3日ぐらいで枯れてしまった。われわれは歴史的なものを再生し、産業に結び付けてきたが唯一、諦めたのがミシマサイコ」。

「御園は邪気がありすぎ」

だが星野会長は「栽培自体は、それほど難しくない」という。

同市谷田の落合ハーブ園（落合正浩社長）は根の利用はいろいろな制約があって難しいため、茎や葉の活用を考えた。県立大で茎や葉の成分を分析してもらったところ、根ほどではないものの、サイコとしての特性があることが分かった。そこで茎や葉を使ったお茶やあめを商品化した。

落合社長（59）は「ミシマサイコの栽培は5年ほど前から本格化させ、お茶やあめは売れ筋の一つになっている。ほかの商品は今考えていないが、癖がなく取り入れやすく、風呂に入れたり、サイコを餌に家畜を飼育して肉や牛乳のブランド化、また魚の餌に交ぜても面白い」と提案し、サイコ栽培で農家が生活できるようにするのが夢だと語る。

細野高原の自生植物園で数を増やすミシマサイコ。一見、雑草のようだ

伊豆市に観光施設構想

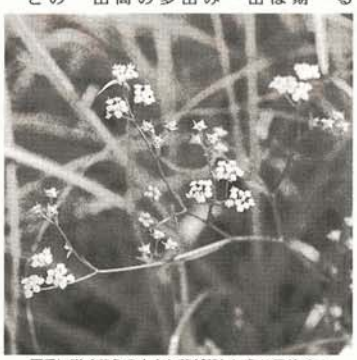
五輪会場に植栽も　花言葉は初めてのキス

三島市でハーブ園を経営する落合さんは、伊豆市内でミシマサイコを含めたハーブ主体の新たな観光施設の整備を構想する。"花を見てもらい、栽培したサイコなる。和のハーブ"ミシマサイコを見てもらいたい」と期待を込める。

ミシマサイコの会の星野会長は「ミシマサイコの花言葉は『初めてのキス』。若い人たちに向け、花言葉を生かした利活用も検討していきたい」と夢を膨らませ、サイコへの期待は高まる一方だ。

家にあって商売をするほど採ったようだ」。

また「江戸時代後期に著された伊東誌には伊東近郷の山中より出す薬品は最上品たり。江府および大阪へ積み出す。伊豆国中多く出すといえども伊東最多とすべし。薬種産物の中でこの品のほか金高多く出す品なし。吉田村、富戸村、鎌田村、十足村、萩村、池村の産物に載せたりなどとある」と解説した。



夏季に咲く黄色の小さな花が美しいミシマサイコ

ミシマサイコとは

園芸植物大事典（小学館刊）などによれば本州、四国、九州、朝鮮半島にかけての山野に自生する多年草で、和名が三島柴胡。高さは1㍍に達する。夏～秋に茎の先に小さな黄色い花を無数に付ける。葉は線形で互生し、長い柄を持つ。果実は無毛で卵球形。根を乾燥したものを生薬名で「柴胡」といい、重要な解熱、解毒、鎮痛、消炎薬として用いられ、単体でなく、多くの薬草を配合した漢方処方で使われる。一例が食欲不振、胃炎、風邪などには柴胡、黄芩などを配合した小柴胡湯、高血圧、慢性肝炎などには柴胡、半夏などを配合した大柴胡湯。江戸時代の旅人は日本産のミシマサイコは静岡県や神奈川県の山野で良質なものが採れ、かつて三島地方に集荷されたのでその名のが習わしになっていたといわれる。

中国最古の本草（薬草）書である「神農本草経」に「芘胡」の原名で収録されるが、一般的に「柴胡」と書く。中国では産地によって種類が多少異なり、わが国に輸入される中国産は「北柴胡」と「津柴胡」で、そのほか韓国産は「山柴胡」（野生品）と「植柴胡」（栽培品）。日本産のミシマサイコは静岡県や神奈川県の山野で良質なものが採れ、かつて三島地方に集荷されたのでその名のが習わしになっていたといわれる。